



科学の眼

まなこ

発行: 姫路科学館 (〒671-2222 姫路市青山 1470-15 電話: 079-267-3961)
<https://www.city.himeji.lg.jp/atom/>

生物シリーズ

秋の野を彩る青い花

リンドウ

Gentiana scabra

姫路科学館 学芸・普及担当 松本 万尋

秋に咲く美しい青紫色の花、リンドウ。漢字では「竜胆」と表されるこの植物は、枕草子や源氏物語に登場し、藤原定家によって「りうたん（竜胆）の花の色こそさきそむれなべての秋はあさぢふのすゑ」と詠まれるなど、古くから人々に愛されてきました。近年では9月の誕生花としても知られるリンドウについてご紹介しましょう。

■リンドウの特徴

リンドウ科リンドウ属の多年草で、本州、四国、九州に分布します。山野や湿った草地を好み、姫路市の花であるサギソウの自生地で見つかることもあります。植物体各部にそれぞれ注目してみると、茎は直立または斜上し高さは20-90 cmと幅があります。葉は対生して茎を抱くようにつき、長さ4-12 cm、幅1-3 cmで、まるでササの葉のように先端が尖った形をしています。花は釣鐘状で長さは4.5-6 cm、9~11月に花期を迎えます。多くのリンドウ属の植物と同様に、天気の悪い時や夜間は花を閉じます。

リンドウ属植物は世界に約400種が知られ、日本にも13~18種が自生するといわれています。北海道などに分布するエゾリンドウ (*G. triflora*) や、高山に生えるミヤマリンドウ (*G. nipponica*)、春に開花するハルリンドウ (*G. thunbergii*) といった種があります。

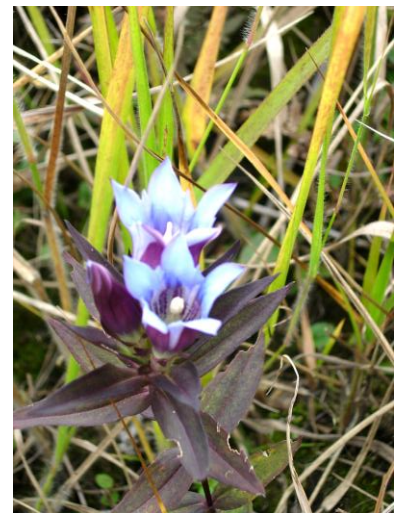


図1 リンドウの花



図2 リンドウ (さくよう 腊葉標本)

姫路科学館蔵

■「秋の青い花」くらべ

秋に咲く青色の花といえば、キキョウも有名ですね。6～10月に花期を迎えるキキョウは、リンドウと同様に、家紋（明智家の桔梗紋が有名）にあしらわれたり古典文学に登場したりと、昔から人々の目を惹きつけてきたようです。リンドウとキキョウはどちらも五角形の花をつけますが、キキョウの花は全体が開いて星形に咲くのに対して、リンドウの花は釣鐘に例えられるように袋状になっていることで見分けられます。分類も大きく異なり、リンドウの仲間がリンドウ目であるのに対して、キキョウはキク目に分類されます。

■生薬として

花を楽しむだけではなく、リンドウは薬としても利用される植物です。リンドウの根や根茎を乾燥させたリュウタン（竜胆）は、生薬として日本薬局方にも掲載されています。

似た名前の生薬にユウタン（熊胆、くまのい）があり、これはヒグマやその近縁種の胆汁を乾燥させたものです。生薬には酸味、甘味、苦味、辛味、鹹味の「五味」^{さんみ かんみ くみ しんみ かんみ}に応じた作用があるとされており、ユウタンは代表的な「苦味」のひとつです。漢方において、苦味は口内の味覚神経終末を刺激し、唾液や胃液の分泌を高め、消化機能の改善、食欲増進に役立つと考えられています。ユウタンの主成分である胆汁代謝物のウルソデオキシコール酸には利胆作用、肝機能改善作用、消化吸收改善作用があり、消化器系の症状に広く用いられます。

リンドウの根であるリュウタンは、ユウタンよりもさらに苦いという意味で名づけられており、この名前を音読みしたものが和名の「リンドウ」です。漢方においては、苦味の効能とされる健胃を主な目的として用いられます。ゲンチオピクロシドなどの成分が含まれ、胃液分泌促進、腸管運動促進、抗菌、抗炎症作用をもつ生薬です。ゲンチオピクロシドの名前は、ヨーロッパで古くから薬用として用いられていたリンドウ属植物のゲンチアナ (*G. lutea*) に由来します。

■身近だった野の花

かつてリンドウは水田周辺の草地やため池の堤防など、人の手で短く刈り込まれている草地によく見られました。しかし近年ではそのような手入れが行われる場所が減っており、リンドウの美しい花を見かけることは稀になっています。リンドウが咲く草地のような、里山環境で繁栄してきた植物たちを育む自然をどうすれば後世に残していけるのか、考え続けていきたいものです。



図3 リンドウの根（腊葉標本）

姫路科学館蔵

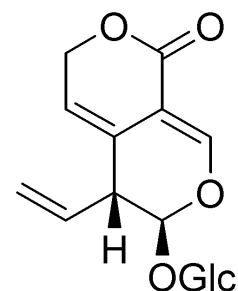


図4 ゲンチオピクロシドの構造式